

## 2.3 仏教の思想と信仰

### 2.3.1 仏教以前の思想

#### インダス文明とバラモン教

前 2300 年～前 1800 年頃 インダス文明：インダス川流域に栄えた都市文明（ドラヴィダ人？）

前 1500 年頃 （ ）人<sup>1</sup>インド侵入，先住民を征服

⇒（ ）四姓制度とバラモン教の成立 cf.現在のカースト=ヴァルナ+ジャーティ

：バラモン（祭司）・クシャトリア（王侯，武士）・パイシャ（庶民）・シュードラ（奴隷）

#### バラモン教 Brahmanism

：『（ ）』Veda を聖典とし，バラモン階級を中心とするアーリヤ人の民族宗教

『（ ）・ヴェーダ』：最古の文献，讃歌

『サーマ・ヴェーダ』：旋律

『ヤジュル・ヴェーダ』：祭祀

『アタルヴァ・ヴェーダ』：呪文

・ヴェーダの宗教の特徴：自然崇拜の多神教，呪術宗教，靈魂不滅

・ヴェーダの神々：インドラ（帝釈天），ヴァルナ（水天），サラスヴァティー（弁才天）

⇒多神教の世界と形式的な祭祀主義に満足できなくなった哲人たちは根源的な宇宙の根本原理を追究

#### ウパニシャッド哲学

『ウパニシャッド（奥義書）』：ヴェーダの最終部，師から弟子に伝達される「秘義」

・ウパニシャッド哲学の中心思想

1.（ ）：靈魂は永遠に再生と再死を繰り返す。

因果応報：人間の運命や来世の生活はその行為（ ）によって決定する。

Cf.善因善果，悪因悪果

2.（ ）：梵=ブラフマン（宇宙の本質）と我=アートマン（自己の本質）は一体

であるということ。この真理を体得することによって輪廻の苦しみから

（ ）できる。

#### 自由思想家たち

前 6～5 世紀 都市国家，貨幣経済の浸透 → バラモン階級の社会的発言力低下

⇒自由思想家たちによるバラモン教祭祀主義への批判

代表者：ゴータマ・ブッダや（ ）=仏道にはずれた六人の思想家<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> インドヨーロッパ系。中央アジアで遊牧生活を送っていたが，前 2000 年紀にイラン・インド，ヨーロッパへ移住。

<sup>2</sup> 道徳否定の富蘭那迦葉（ふらんなかしょう，プーラナ・カッサパ）、決定論の末伽梨拘舍梨（まかりくしゃり，マッカリゴーサーラ）、懐疑論の刪闍耶毘羅胝子（さんじゃやびらていし，サンジャヤ・ベラッティプッタ）、快楽主義的唯物論の阿耨多翅舍欽婆羅（あぎたきしゃきんばら，アジタ・ケーサカンパリン）、因果否定論の迦羅鳩駄迦旃延（からくだかせんねん，パクダ・カッチャーヤナ）、ジャイナ教の祖、尼乾陀若提子（にけんだにやたいし，ニガンタ・ナータプッタ，本名ヴァルダマーナ，尊称マハーヴィーラ）の六人

## バラモン教とヒンドゥー教

「バラモン教」というのは、古代インドにおいて、仏教興起以前に、バラモン階級を中心に、ヴェーダにもとづいて発達した宗教を指しています。これは、いわゆるヒンドゥー教と区別するために西洋の学者が与えた人為的な呼称 **Brahmanism** の訳語です。大ざっぱにいうとヴェーダの宗教とお考えいただいてもよろしいかと思います。

紀元前 3～2 世紀頃のインドにおいては、紀元前 6～5 世紀頃に起こった歴史的・社会的大変動の結果、ヴェーダ文化の枠組みが崩壊してバラモン教が衰退し、代わって仏教がインドの宗教・思想界の主流をなしていました。主流の座を仏教に譲ったバラモン教は、土着の非アーリヤの民間信仰・習俗などの諸要素を吸収し、大きく変貌をとげ、いわゆるヒンドゥー教が成立するに至りました。この変貌したバラモン教を旧来のバラモン教と区別するためにヒンドゥー教と名づけられました。

(前田専学『インド哲学へのいざないーヴェーダとウパニシャッド』日本放送出版協会、2000年)

### 《リグ・ヴェーダ》の神話

前 1500 年から前 900 年ごろに作られた、最古のヴェーダ文献である《リグ・ヴェーダ本集》には、一貫した筋の神話は見いだされないが、なんらかの神話を前提として詩作したと思われる。特に、《リグ・ヴェーダ》において最高神の地位にあるインドラ(帝釈天)を中心とする神話の存在がうかがわれ、実に全賛歌の約 4 分の 1 が彼に捧げられている。インドラは元来、雷霆(らいてい)神の性格だが、《リグ・ヴェーダ》においては、暴風神マルト **Marut** 神群を従えてアーリヤ人の敵を征服する、理想的なアーリヤ戦士として描かれている。インドラは代表的なデーバ **deva** である。デーバは神であり、それに対するものがアスラ **asura**(阿修羅)である。アスラは《リグ・ヴェーダ》においては、必ずしも悪い意味で用いられなかったが、しだいに神々に敵対する悪魔を指すようになった。

インドラに次いで重要な神はバルナ(水天)である。バルナは典型的なアスラである。バルナは宇宙の秩序と人倫を支配する司法神である。彼は人々の行為を監視し、罪人を捕縛し、腹水病にかからせる峻厳な神であるが、その半面、悔い改める者に対しては慈しみ深い。後に、バルナは単なる水の神、海上の神の地位に落ち、仏教にとり入れられて水天となった。

バルナと不可分の関係にあるミトラは契約の神である。《リグ・ヴェーダ》には、以上のほかに、天神ディヤウス、大地の女神プリティビー、火神アグニ、酒神ソーマ、太陽神スーリヤ(日天)、暁の女神ウシヤス、風神バーユ、河川の女神サラスバティー(弁財天)、死神ヤマ(閻魔)などに対する賛歌がある。

(平凡社『世界大百科事典』より)

### ごう【業】

行為を意味するサンスクリットのカルマン **karman** の漢訳語。善人も悪人も死んでしまえばみな同じだというのは不公平だという考えをもとに、ウパニシャッド文献では、輪廻思想の成立とともに急速に理論化されるにいたった。行為は、身体的な行為(身業)、語るという行為(口業)、思うという行為(意業)に分類されるが、それらの行為はその場かぎりで消えるのではなく、不可見のいわば潜勢体(功德と罪障、法と非法)として行為の主体につきまとう。やがて時(基本的に来世)がいたればそれが順次に果報として結実し、同じ主体によって享受されて消滅する。自分の行為の結果は自分で享受することが原則で、これを〈自業自得〉といい、輪廻の主体としてのアートマン(自我)についての考察を推進させた。

(平凡社『世界大百科事典』より)

### ジャイナ教 Jaina, Jainism

紀元前 6～前 5 世紀ごろ、ゴータマ・ブッダ(釈迦(しゃか))とほぼ同時代のマハービーラ(ヴァルダマーナ)によって創設され、今日もなお生命を保つインドの宗教。とくに**アヒンサー**(生きものを傷つけないこと、不殺生(ふせっしょう))の誓戒を柱とする厳格な禁欲主義で知られる。小学館『日本大百科全書』より

## 2.3.2 仏陀の教え

### ブッダの呼称

本名：( ) (前 463 頃～前 383 頃)  
 釈迦牟尼 ( )：釈迦族の聖者  
 仏陀 ( )：正しく目覚めた人・悟った人  
 世尊, 釈尊

### 仏陀の生涯

西暦	年齢	年 譜
前 463	0 歳	ヒマラヤ山麓カピラヴァストゥ (現在ネパール) で生まれる 誕生直後の言葉「( )」 父はシャーキャ族の王, シュッドダナ (浄飯王: じょうぼんおう) 生後 7 日母マーヤー (摩耶夫人: まやぶにん) を失う
前 447	16 歳	ヤショーダラー (耶輸陀羅) と結婚 ラーフラ (男の子) 生まれる 何一つ不自由のない生活を送る  ( ) →人生に悩み出家を決意
前 434	29 歳	<b>出家</b> 断食, 不眠などの苦行を続けるが満足を得られない
前 428	35 歳	ブッダガヤの菩提樹の下で座禅, 黙想中にすべての苦悩を解消。 <b>解脱 (悟り)</b> に至る。 ベナレス郊外の鹿野苑で <b>初転法輪</b> (しょてんぼうりん: 最初の説法)
前 383	80 歳	<b>入滅 (死亡)</b> クシュナガラ沙羅双樹 (さらそうじゅ) の下で病死

**四門出遊**：彼が郊外にでかけようとして、東南西北の城門を通ったところ、老人、病人、死人と出会い苦悩を深めた、最後に出家者を見かけ、深く感じるところがあって出家をこころざしたという。

**釈迦の生涯** 世界大百科事典 (平凡社) より

釈迦は歴史的事実の人物であり、その人種的帰属(モンゴル系かアーリヤ系か)や死没年(前 483 年, 前 383 年など、南方仏教圏では前 543 年)は学問上の問題として論じられている(釈迦が 80 歳で死去したことは定説とされる)。

インド・ネパール国境沿いの小国カピラバストゥを支配していた釈迦(シャーキャ)族の王シュッドダナ (浄飯(じょうぼん)王)とその妃マーヤー (麻耶)の子としてルンビニー園で生まれた。姓はゴータマ Gotama(釈迦族全体の姓), 名はシッダールタ Siddhrtha(悉達多)。生後 7 日目に母を失い、以後は叔母(実は継母でもある)マハープラジャーパティーに育てられた。アシタ仙人から、〈長じて偉大な王になるか、偉大な宗教者になる〉との予言をうけたため、王になってほしいと願う父王によって何ひとつ不自由のない王宮の生活があてがわれた。しかし、耕作の光景に接し、農夫や牛馬の勞する姿を見、露出した虫が鳥についばまれるさまを見て世の苦しみを悟る。また城の東・西・南・北の門から外出しようとして老人、病人、死人、出家者に遭遇し、自分の進むべき道を見出す。ヤショーダラーを妃とし、一子ラーフラ R`hula をもうけたあと、一夜、愛馬カンタカと御者チャンダカを従えて城を脱出し、マガダ国で沙門(修道者)の生活に身を投ずる。2 仙人に禅の指導をうけたが満足せず、6 年苦行に励んだが得るところなく、村娘スジャータの提供する乳粥で体力をつけ、ネーランジャラー河畔のアシュバッタ樹の根方で瞑想に入り、ついに菩提(悟り)を得て

仏陀(悟った人)となった(アシュバツタ樹はこれよりのち菩提樹と呼ばれる)。最初の説法はムリガダーバ(鹿野苑(ろくやおん))で5人の比丘(びく)に対して行われた。その後、拝火外道のカーシャパ3兄弟とその弟子たち合計1000人や、シャーリプトラ(舍利弗)、マハーマウドガリヤーヤナ(目連)、マハーカーシャパ(摩訶迦葉)らが弟子になった。故国からは従兄アーナンダ(阿難)、理髪師ウパーリ(優波離)、息子ラーブラ(羅順羅)が弟子に加わった(十大弟子)。比丘(男の出家者)のほかに、比丘尼(女の出家者)、優婆塞(うばそく)・優婆夷(うばい)(男女の在家信者)もできた。釈迦はガンガー(ガンジス川)中・下流域の平原、なかんずくマガダ国のラージャグリハ(王舎城)とコーサラ国のシュラーバスティー(舎衛城)で活動した。前者には国王ビンビサーラの寄進した竹林精舎が、後者にはアナータピンダダ(給孤独(ぎつこどく))長者の寄進した祇園精舎があった。

釈迦の教勢が盛んになるにつれ、法敵も増えた。彼の従弟とされ、のちに彼に離反するデーバダツタ(提婆達多)からは狂象をけしかけられ、祇園精舎ではバラモンたちから女性と密通しているとの虚偽の告発がなされた。実際、釈迦の教えはバラモン教の階級制度や祭式至上主義を脅かすものであった。彼の教団では僧の順位は出身階級に関係なく、出家後の年数で決められた。真のバラモンとは生れによるのではなく、行いによるのであった。そして不殺生の教義はバラモン教の犠牲式を否定し、出家主義は祖霊祭をつかさどる子孫の確保を困難ならしめた。ほかに六師外道と呼ばれるライバルもいた。

釈迦の教義は人の心の悩みを解決することをめざした。心の悩みの解決は祭式のような外形的行為によっては達成されない。各人が自己の内面から行う変革によらねばならない。そのための基本的な出発点となるのが四諦・八正道や十二因縁の教義である。これは、一言でいえば、苦悩のよってきたる淵源を追求し、その淵源(おそらく〈我あり〉との妄執)を取り除くことを教えている。これは当時にあっては驚くほど科学的・合理的な態度である。しかも、自己存在の問題について、現代の深層心理学を先取りするような先見性を示している。これは仏教発展の背後に都市と商人階級という進んだ社会があった事実を反映しているかもしれない。

釈迦は29歳で出家し、35歳で悟り、45年教化活動を行って、80歳で死去した。故国へ向かう旅立ちの途中、食中毒をおこして、クシナガラで2本のサーラ樹(サラソウジュ)の間に横たわって生涯を閉じた。遺体は荼毘(だひ)に付され、遺骨は各地の塔(ストゥーパ)にまつられた。釈迦は遺言として〈自己自身を灯明(あるいは島)とせよ〉〈すべては移ろいやすい、怠らず努めよ〉〈出家者は私の葬儀にかかわるな、葬式は在家者がするであろう〉などと述べた。これらの言葉は彼がいかに人間ひとりひとりの魂の救済に意を注いでいたかを示している。弟子が伝道に赴くときに〈二人していくな、一人ずつ行け〉〈俗語で説け〉と言ったのも、教えをできるだけ多くの人のものにするためであった。慈悲の精神と涅槃の理想が彼の教えを貫いている。

後世の仏教徒はしだいに釈迦を神格化し、その伝記を粉飾する傾向をもった。輪廻(りんね)転生の思想に基づき、釈迦は今世に出現するまでにすでに多くの生存をくりかえし、そのつど善行に励んだとされた。このいわば修行時代の釈迦は、ボーディサットバ Bodhisattva(菩提を求める者)と呼ばれ、彼の前世物語(ジャータカ、本生譚)がいくつもつくられた。一方、大乘仏教では、彼は永遠の仏の顕現とされ、化身または応身と呼ばれるようにもなった。釈迦の誕生日については〈バイシャーカ月白分8日(または15日)〉の伝承が生まれ、中国暦ではこれが4月8日に換算され、南方仏教圏ではベーサク月(4月～5月)の満月の日にあてられている。



## 2.3.3 仏教の展開

### 仏教教団の分裂

( ) : 仏陀入滅後の仏説の確認と集成の作業

第1回結集… 釈尊入滅後、マガダ国のラージャグリハ(王舎城)で500人の弟子たちが集まって開かれた。釈尊の侍者アーナンダが中心となって教法(経蔵: 仏陀の言行録)が結集され、ウパーリが中心となって戒律(律蔵: 教団の規則集)が結集された。

第2回結集… 入滅100年後、仏教教団の内部で戒律の実践についての対立  
⇒上座部と( )部の分裂

第3回結集… 前3世紀 マウリア朝( )王の時代

第4回結集… 2世紀 クシャーナ朝( )王の時代

※ 三蔵: 経蔵・律蔵・論蔵(経と律に対する注釈的研究)。三蔵を網羅した經典を一切経あるいは大蔵経という。

原始仏教から( ) 仏教へ

原始仏教: 釈迦入滅から約100年間ガンジス川流域に行われた仏教

入滅約100年後、戒律をめぐる対立

⇒ 根本分裂 ( )部: 保守派長老 vs 大衆部: 進歩派比丘

→ 以後分派を繰り返しながら精緻な教学(論蔵: アビダルマ)を成立・発展, 上座部系11部派と大衆部系9部派の小乗20部が成立 = 部派仏教

部派仏教(=アビダルマ) 仏教 (⇒後に小乗仏教と呼ばれる)

・( ): 部派(小乗) 仏教が理想とする修行の完成者。仏弟子が修行によって達しうる最高位

⇒ 出家中心主義: 修行による個人的悟り(自利行)を目標とする

### 大乘仏教の成立

・部派仏教から大乘仏教へ

前1世紀 新仏教運動 …… 出家中心主義 → ( ) 信者<sup>5</sup>の救済

( ): あらゆる人の救いをめざす大きな乗り物

小 乗 : 旧仏教=限られた出家者だけの小さな乗り物

大乘仏教の特徴

・( ): [ボーディサッタ] 悟りを求めて努力する求道者。( )を重視し、自己の悟りよりも衆生の救済を優先(利他行)する大乘仏教の理想の人間像。→自利行の阿羅漢は卑しめられる

・經典崇拜: 大乘經典の受持・読誦・解説・書写に功德があるという考え

<sup>4</sup> 金銀錢による布施を受け取ることが是か非かという問題など

<sup>5</sup> アショーカ王が建立を推進した仏塔(ストゥーパ)に仏陀の遺骨を納める塔)の崇拜者たち

## 大乘仏教の思想

## ■般若経典（大乘仏教最初期の経典群）の思想

- ・（ ）の思想：あらゆるものは固定的な実体をもたない。（縁起説の深化）

Cf. 「色即是空、空即是色（般若心経）」

：物質的存在は無実体であり、無実体なるものが物質的存在である

- ・（ ）：菩薩が実践して完成させるべき六つの修行の完全な在り方
  - 1.布施(与えること), 2.持戒(じかい: 戒律を守ること), 3.忍辱(にんにく: 耐え忍ぶこと), 4.精進(しょうじん: ひたすら努力すること), 5.禅定(ぜんじょう: 心を集中・安定させること), 6.智慧(とらわれなく判断すること)

⇒その中でも、智慧=般若波羅蜜=悟りを得るための真実の知恵を重視した

cf. 維摩経: 空の思想を説く。在家の長者の維摩に小乗の仏弟子がやりこめられる

## ■中観派の思想

- ・（ ） 150～250 頃 著作『（ ）』

空の思想の哲学的基礎づけ…般若経の空（不変の実体がないこと）が仏陀の説く縁起であることを強調。有でもなければ無でもない、空と縁起を中道と見なす

## ■唯識派（瑜伽行派）の思想

- ・マイトレーヤ：弥勒 270 頃～350 頃…… 唯識派の始祖？

- ・（ ） 310 頃～390 頃…… マイトレーヤに学び大乘へ『撰大乘論』

- ・（ ） 320 頃～390 頃…… アサンガの弟、多くの解説書『唯識二十論』

ヨーガの実践 ⇒ 唯識「あらゆる存在は心がつくり出した影像にすぎない」

⇒ 識のあり方を汚れた状態から清浄な状態へ変革して、汚れた識を転じて清らかな智慧を得るという「転識得智」を究極の目的

アーラヤ識（阿頼耶識）：過去の業を種子として背負い込んだ潜在意識

7 世紀に玄奘が中国に伝えて法相宗が成立

## ■如来蔵説：すべての人に如来（仏）となる可能性がある。

=（ ）：大乘『涅槃経』

## ■密教（秘密仏教）の思想

6～7 世紀 大乘仏教の理論化、学問化が進む

7 世紀中頃 密教経典の成立 『大日経』『金剛頂経』

→（ ）への信仰、除災招福など現世利益を目的とした儀礼・呪法

曼荼羅（マンドラ）：宇宙の真理を表すために仏菩薩を枠の中に配置して図示したもの

## 仏教の伝播

（ ）：大乘）仏教：チベット、中国、朝鮮、日本などに行われている仏教の総称。ネパールで入手したサンスクリット(あるいは仏教梵語)で書かれた仏典に基づく仏教。

（ ）：上座部）仏教：スリランカ(セイロン)、ミャンマー、タイ、ラオス、カンボジアなどの南方諸国に行われている仏教。スリランカ(セイロン)で得たパーリ語で著された仏教典籍に基づく仏教

<sup>6</sup> 瑜伽（ゆが）：ヨーガのこと

## 仏陀の言葉

中村元訳『ブッダのことば (スッタニパータ)』(岩波文庫, 1984) より

### 第一 蛇の章

75 今の人々は自分の利益のために交わりを結び、また他人に奉仕する。今日、利益をめざさない友は、得がたい。自分の利益のみを知る人間は、きたならしい。犀(さい)の角のようにただ独り歩め。

#### 賤しい人

116 「怒りやすく恨みをいだき、邪悪にして、見せかけであざむき、誤った見解を奉じ、たくらみのある人、——かれを賤しい人であると知れ。

117 一度生まれるもの(胎生生物)でも二度生まれるもの(卵生生物)でも、この世で生きものを害し、生きものに対するあわれみのない人、——かれを賤しい人であると知れ。

136 生まれによって賤しい人となるのではない。生まれによってバラモン(バラモン教の司祭者)となるのではない。行為によって賤しい人ともなり、行為によってバラモンともなる。

#### 慈しみ

143 究極の理想に通じた人が、この平安の境地に達してなすべきことは、次のとおりである。能力あり、直く、正しく、ことばやさしく、柔和で、思い上がることのない者であらねばならぬ。

144 足ることを知り、わずかの食物で暮らし、雑務少なく、生活もまた簡素であり、諸々の感覚が静まり、聡明で、たかぶることなく、諸々の(ひとの)家でむさぼることがない。

147 目に見えるものでも、見えないものでも、遠くに住むものでも、近くに住むものでも、すでに生まれたものでも、これから生まれようと欲するものでも、一切の生きとし生けるものは、幸せであれ。

### 第二 小なる章

#### 船

316 ひとがもしも他人から習って理法を知るならば、その人を敬うことは、あたかも神々がインドラ神(帝釈天)を敬うがごとくになすべきである。学識の深いその(師)は、尊敬されれば、その人に対して心からよるこんで真理を顕示する。

317 思慮ある人は、そのことを理解し傾聴して、理法にしたがった教えを順次に実践し、このような人に親しんで怠ることがないならば、識者・弁(わかま)え知る者・聡明なる者となる。

318 未だことがらを理解せず、嫉妬心のある、くだらぬ人・愚者に親しみつかえるならば、ここで真理(理法)を弁え知ることなく、疑いを超えないで、死に至る。

#### 精励

333 神々も人間も、ものを欲しがり、執著(しゅうじゃく:ある物事に深く思いをかけてとらわれること)にとらわれている。この執著を超えよ。わずかの時をも空しく過ごすことなかれ。時を空しく過ごした人は地獄に落ちて悲しむからである。

#### ダンミカ

400 (1) 生きものを害してはならぬ。(2) 与えられないものを取ってはならぬ。(3) 嘘をついてはならぬ。(4) 酒を飲んでではならぬ。(5) 姪事(いんじ:不倫など)たる不浄のおこないをやめよ。(6) 夜に時ならぬ食事をしてはならぬ。

401 (7) 花飾りを着けてはならぬ。(8) 地上に床を敷いて臥す(ふす:寝る)べし。これこそ実に八つの項目より成るウポーサタ(齋戒)であるという。苦しみを終滅せしめるブッダが宣示したもうたものである。

#### 矢

574 この世における人々の命は、定まった相(すがた)なく、どれだけ生きられるか解らない。いたましく、短くて、苦悩をとまなっている。

578 若い人も壮年の人も、愚者も賢者も、すべて死に屈服してしまう。すべての者は必ず死に至る。

581 このように世間の人々は死と老いによって害(そこな)われる。それ故(ゆえ)に賢者は、世のなりゆきを知って、悲しまない。

582 汝(なんじ:あなた)は、来た人の道を知らず、また去った人の道を知らない。汝は(生と死の)両極を見きわめないで、いたずらに泣き悲しむ。

584 泣き悲しんでは、心の安らぎは得られない。ただかれにはますます苦しみが生じ、身体がやつれるだけである。

585 みずから自己を害いながら、身は痩せて醜くなる。そうしたからとて、死んだ人々はどうにもならない。嘆き悲しむのは無益である。

#### 欲望

766 欲望をかなえたいと望んでいる人が、もしもうまくゆくならば、かれは実に人間の欲するものを得て、心に喜ぶ。

767 欲望をかなえたいと望み貪欲(とんよく)の生じた人が、もしも欲望をはたすことができなくなるならば、かれは、矢に射られたかのように、悩み苦しむ。

768 足で蛇の頭を踏まないようにすると同様に、よく気をつけて諸々の欲望を回避する人は、この世でこの執著をのり超える。